

氏名	田中 夕子
研究テーマ	念仏聖像の変遷—空也・良忍を中心に—
研究概要	成立時期によって変貌する説話のなかの聖像を考察する。中でも往生伝に収録された念仏聖の空也・良忍に関する説話を収集して、平安時代後期から鎌倉時代までの変遷を明らかにする。空也や良忍は、鎌倉時代に肖像彫刻となったり、絵巻物のモチーフとなったりしている。また、空也や良忍は、中世に撰述された法然の伝記や、親鸞門下の教化の文書や書物のなかで言及されている。資料・文学作品・教化の言説と造形作品を比較、考察して、仏教文化史上の位置づけを行う。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>2018 年度前期は前年度課題であった往生人・源俊房についての論文を執筆した。執筆後、本年度の課題の一つである良忍に関する資料・参考文献を収集、考察した。良忍の念仏を主題とする『融通念仏縁起絵巻』(以下、本絵巻)は、正和3年(1314)に原本が制作され、その後、多くの写本が造られた。良忍のイメージは本絵巻が定着させたといっても過言ではない。本絵巻で良忍は、比叡山の碩徳であったが23歳で大原へ隠遁、夢想によって融通念仏を感得の後、都へ出て道俗男女に融通念仏を勧めたと説く。しかし、現存する良忍の初期の説話では、大原に隠遁して念仏に専心する姿が中心であり、本絵巻に描かれたような都で融通念仏を勧める以前の姿であった。</p> <p>良忍の説話を考察すると、そのイメージは平安～鎌倉時代に様々に展開した。それは、①往生人、②権者、③融通念仏の祖師、④声明の祖師、⑤以上を組み込んだ総合的な良忍像である(拙稿2015)。中世、遁世僧が活躍し、その中には念仏聖もいた。また、当時の説話に取り上げられた念仏聖には、賀古沙弥教信のように日常の中で一向に念仏を行う者、空也のように市井で積極的に念仏勧進する者などがあり、念仏聖のイメージにも多様性があった。</p> <p>考察の結果、本絵巻の良忍像は、市井で融通念仏を勧進する念仏聖グループが、グループの祖師として相応しい姿、つまり、俗世間から隔離した念仏聖でなく、人々の中で精力的に活動する姿に焦点を当てたものであり、それを絵巻に表して定着させたものと考えられる。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>論文:「往生人・源俊房の信仰と行業」、『日本宗教文化史研究』第23巻第1号、日本宗教文化史学会、2019年5月刊行予定。</p>
3. 今後の課題	<p>課題の一つであった空也に関しては、時間を十分に確保することができなかった。そのため、空也については研究を継続する予定である。また、2019年度は、平安時代後期の貴族の作善について考察を行う。この時代は念仏聖が注目され始めた時期である。念仏聖の記事を収めた貴族の日記に収録された作善を考察して、当時の貴族が考えていた作善の意味を明らかにすると共に、平安時代仏教史における作善の意義を総合的に考察する。</p>